

Annika Thor 『ステフィとネッリの物語』シリーズから読み解く、
第二次世界大戦下におけるユダヤ系移民の
アイデンティティの確立と成長について

スウェーデン語専攻 上原 智子

目次

1. はじめに
 2. 作者紹介とあらすじ
 - 2.1. 作者アニカ・トールについて
 - 2.2. 作品の成立背景
 - 2.3. 作品のあらすじ
 3. 主人公ステフィのアイデンティティの確立と成長
 - 3.1. ステフィの自己相対化を通じた成長
 - 3.1.1. 異文化受容の観点における分析
 - 3.1.2. 宗教の観点における分析
 - 3.1.3. 人種の観点における分析
 - 3.1.4. 恋愛の観点における分析
 - 3.2. 妹ネッリとの自己形成過程の比較
 - 3.3. ステフィと第二次世界大戦
 - 3.3.1. 自己形成の戦争による弊害
 - 3.3.2. ステフィから見た第二次世界大戦
 4. 本作のスウェーデンにおける受容
 5. まとめ
- 使用テキスト
邦文参考文献
欧文参考文献
インターネット上の資料

要約

1939年ヨーロッパに在住していたユダヤ人の子供のうち、第二次世界大戦の終戦まで生き延びることができたのはわずか11%に過ぎず、戦時中150万人もの子どもが、ナチス・ドイツの迫害により命を落とした。

戦時中のユダヤ人の子どもをめぐる厳しい境遇は『アンネの日記』を通じて日本でも広く知られているが、イギリスやスウェーデンでユダヤ人の子どもを救出しようと奔走した人々がいたことはあまり知られていない。本稿の題材であるアニカ・トール作(Annika Thor, 1950-)『ステフィとネッリの物語』シリーズは、戦時中オーストリアからスウェーデンに逃れたユダヤ人姉妹ステフィとネッリの、6年間にわたるスウェーデンでの生活を描いた物語である。本稿では、祖国から遠く離れたスウェーデンに移住してきた主人公ステフィの自己成長過程を描いた本作に、どのような作品価値があるか検討を行った。

第1章では、本稿の研究目的を述べ、第2章では、本作の作者や作品の成立背景、あらすじを紹介した。作者のアニカ・トールは戦後のスウェーデン生まれでありながら、ユダヤ人の両親を持つ移民2世である。彼女の家族は戦時中に多くの親戚を失っており、トールは難民として生きる子どもたちへの理解を高めることを目的として、実際にスウェーデンに逃れてきた十数人へのインタビューや研究資料をもとに、本作を執筆したという。

3.1節では、オーストリアからスウェーデンに移住したステフィの成長を、異文化受容、宗教、人種、恋愛の4つの観点から分析した。戦争による難民となったステフィは通常との移住とは異なり、異なる言語や文化を持つ養父母に迎え入れられ、スウェーデン文化圏への同化を余儀なくされる。12歳で祖国を離れたステフィは、児童期に獲得した自己を一度手放すこととなり、困難に満ちた自己形成過程をたどるが、他者や異文化との相対化を通じて、自身についての認識を深め、広い視野や多様な考え方を身につけていく。

3.2節では、ステフィと4歳年下の妹、ネッリとの自己形成過程の比較を行った。姉のステフィはオーストリアを祖国と認識し、スウェーデン文化を受け入れるのに時間がかかったのに対し、8歳でスウェーデンに移住した妹のネッリは素早くスウェーデン文化を受容したものの、自らがオーストリア出身のユダヤ人であることを受け入れることができない。しかし、1943年夏、母親が強制収容所で亡くなったことを知ると、目を背けていた

自らの出自に向き合うことができるようになっていった。

3.3 節では、ステフィの体験した第二次世界大戦についての分析を行った。ステフィは戦争による難民であることの弊害として、自らの帰属について長年苦悩することとなる。子ども時代を母国と違う文化圏で過ごした子どものナショナルアイデンティティに関する問題は現代においても重要な課題であるが、ステフィは養父母や友人達と揺るぎない人間関係を築くことで、オーストリアを祖国としながらも、スウェーデンを第二の居場所として受け入れることができた。また、本作において主人公のステフィは直接的には戦争を経験していないものの、収容所にいる両親からの手紙で戦況を知る胸の痛みは計り知れないもので、戦時下に生き、肉親や祖国を戦争で失うということがどういうことか、読者に強く訴えかける作品となっている。

第4章では、本作がスウェーデンにおいてどのような受容がなされているか分析した。スウェーデンでは本作を原作としたラジオ劇やTVドラマが作られているのに加え、移民を扱った文学として小学校高学年～高校の授業の題材となっている。また、オンライン書店のレビューや個人ブログの書評においては、主人公ステフィの心情が繊細に描写されている点や、第二次世界大戦を新しい切り口から描いている点が高く評価されていた。第5章では、以上の分析を踏まえ、本作の作品価値について検討した。まず、本作の特徴として、主人公ステフィが恋愛や友情といった普遍的な出来事のみならず、異文化間における相対化を通じて自己を確立していく点が挙げられ、そこに自己成長物語としての価値が見出せるとした。また本作は1940年代のスウェーデンを舞台としているが、アイデンティティの形成という普遍的なテーマを重ね合わせることで、読者はステフィに共感しながら物語を読み進めることができ、戦争を「史実」ではなく、「当事者」として疑似体験することを可能にしている点に価値が見出せると結論づけた。戦後70年経つが、いまだに世界は平和とは言えず、戦争や難民の問題は終わることがない。ステフィやネッリのように自己を否定され、祖国や肉親を奪われる子どもたち一人でも少なくなるよう、正しい知識を獲得し、後世に伝えていくことが現代を生きる私たちの使命であるとするれば、本書の果たす役割は多大であると考えられる。